

統計学2及び演習

最強力検定,
ネイマン・ピアソンの補題とその例



創域理工学部

Faculty of Science and Technology

東京理科大学
創域理工学部情報計算科学科
安藤宗司

2023年4月26日

Contents

- 検定の具体例
- 最強力検定
- ネイマン・ピアソンの補題
- 最強力検定の具体例
 - 正規母集団の仮説検定

統計的仮説検定の手順

□ Step1

- 帰無仮説と対立仮説を設定し，有意水準を定める
- 慣例的には， $\alpha = 0.05$ を用いることが多い

□ Step2

- 検定統計量 $T = t(X_1, X_2, \dots, X_n)$ を定める

□ Step3

- 棄却域 $W = \{(x_1, x_2, \dots, x_n) \mid t(x_1, x_2, \dots, x_n) \in R\}$ を求める

□ Step4

- 検定統計量 T の実現値 $t^* = t(x_1, x_2, \dots, x_n)$
- $t^* \in R$ ならば帰無仮説を棄却， $t^* \notin R$ ならば帰無仮説を採択

誤り確率の制御

□ 第1種の過誤確率

■ 検定の大きさ $\sup_{\theta_0 \in \Theta_0} P_{\theta_0}((X_1, X_2, \dots, X_n) \in W)$

■ 検定の大きさが α ($0 \leq \alpha \leq 1$) より小さい検定を, 有意水準 (significance level) α の検定という

$$\sup_{\theta_0 \in \Theta_0} P_{\theta_0}((X_1, X_2, \dots, X_n) \in W) \leq \alpha$$

この式を満たすように W を定める

□ 第2種の過誤確率

■ 検定の段階では制御していない

■ どのように制御するのか?

■ 興味がある方は, 3年後期の「データ解析」を受講

棄却域 W の設定

- 棄却域 W は無数に作ることができる

$$\sup_{\theta_0 \in \Theta_0} P_{\theta_0}((X_1, X_2, \dots, X_n) \in W) \leq \alpha$$

この式を満たすように W を定める

- 検出力が高い（第2種の過誤確率が低い） 棄却域 W を設定したい

具体例. 日本人成人男性の身長

□ 身長が平均 μ , 分散 7^2 の正規分布に従うと仮定

□ Step1

■ 仮説の設定

単純仮説

単純仮説

帰無仮説 $H_0: \mu = 165$ 対立仮説 $H_1: \mu = 170$

■ 有意水準 $\alpha = 0.05$

□ Step2

■ 母集団からの無作為標本 $X \sim N(\mu, 7^2)$

■ 棄却域 W $P_{\mu=165}(X \in W) \leq \alpha$ この式を満たすように W を定めることが可能

■ 検定統計量 $T = t(X)$

$T = X \sim N(\mu, 7^2)$

$T = \frac{X - \mu}{7} \sim N(0, 1)$

具体例. 日本人成人男性の身長

□ Step3

■ 棄却域 $W = \{x \mid t(x) = \frac{x-\mu}{7} \in R\}$ を求める

■ 有意水準 $\alpha = 0.05$ の検定となるように R を定めたい

$$R_1 = \{t \mid t < c\}, \quad R_2 = \{t \mid |t| > c\}, \quad R_3 = \{t \mid t > c\} \quad c \text{ は定数}$$

■ $P(T \in R_1) = P(T < c) = 0.05$ を満たす c を標準正規分布表から求めると, $c = -1.64$

$$0.05 = P\left(\frac{X - 165}{7} < -1.64\right) = P(X < 153.52) \quad \text{棄却域 } W_1 = \{x \mid x < 153.52\}$$

$$\text{検出力 } P(X < 153.52) = P\left(\frac{X - 170}{7} < -2.35\right) = 0.009$$

具体例. 日本人成人男性の身長

□ Step3

- $P(T \in R_2) = P(|T| > c) = 0.05$ を満たす c を標準正規分布表から求めると, $c = 1.96$

$$0.05 = P\left(\left|\frac{X - 165}{7}\right| > 1.96\right) = P(X < 151.28, 178.72 < X)$$

$$\text{棄却域 } W_2 = \{x \mid x < 151.28, 178.72 < x\}$$

$$\text{検出力 } P(X < 151.28, 178.72 < X) = P\left(\frac{X-170}{7} < -2.67, 1.25 < \frac{X-170}{7}\right) = 0.109$$

具体例. 日本人成人男性の身長

□ Step3

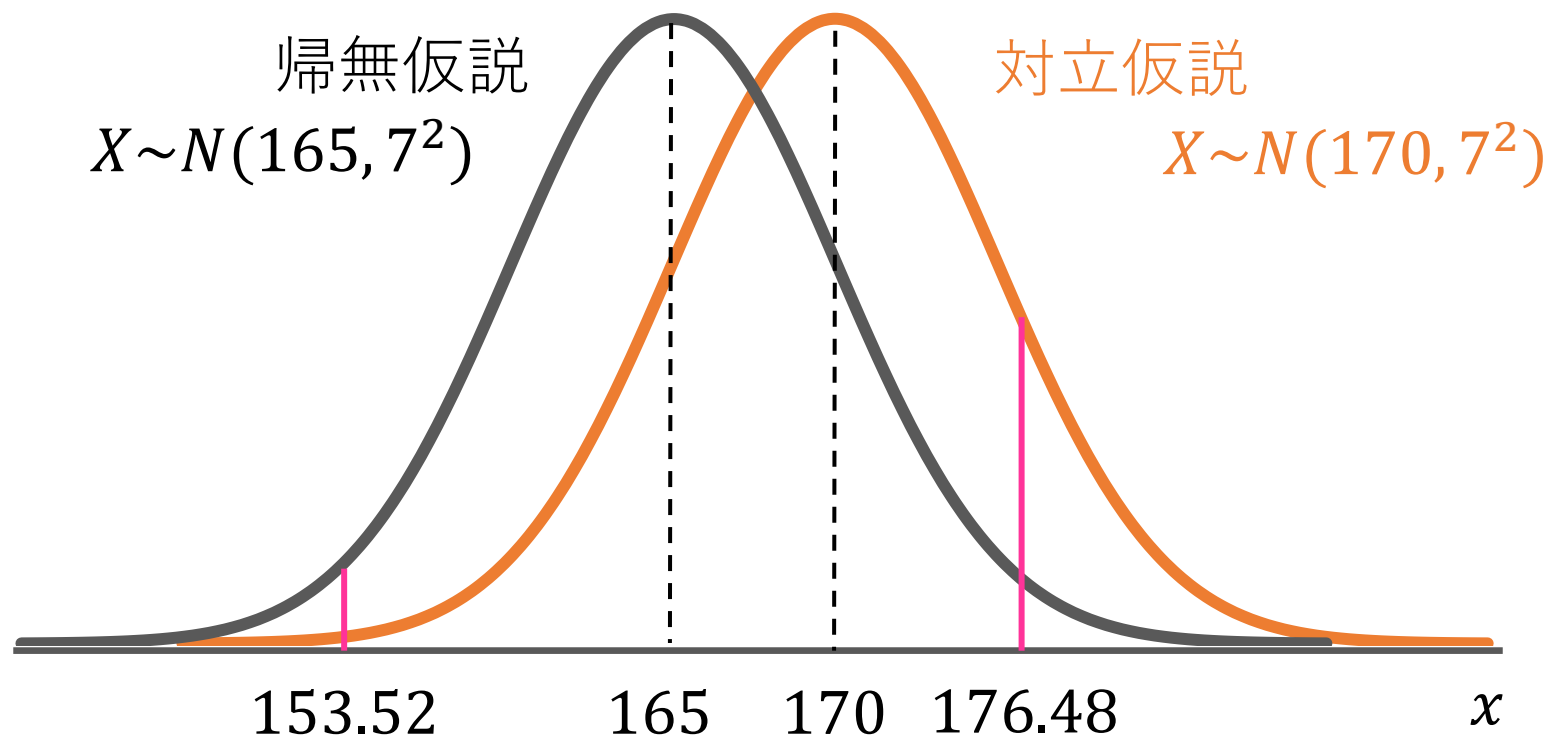
■ $P(T \in R_3) = P(T > c) = 0.05$ を満たす c を標準正規分布表から求めると, $c = 1.64$

$$0.05 = P\left(\frac{X - 165}{7} > 1.64\right) = P(X > 176.48)$$

棄却域 $W_3 = \{x \mid x > 176.48\}$

$$\text{検出力 } P(X > 176.48) = P\left(\frac{X - 170}{7} > 0.93\right) = 0.176$$

概念図



棄却域 W_3 を用いた検定は，他の棄却域を用いた検定よりも検出力が高くなる

具体例. 日本人成人男性の身長

□ Step4

- 母集団から無作為に選ばれた一人の身長が166.9cmであった
- $t^* = \frac{166.9-165}{7} = 0.27 \notin R_3$
- $t^* \notin R_3$ より帰無仮説を採択

一般論

- 具体例では, 1個の標本の場合について議論した
- ここからは, 一般に n 個の標本を用いた場合を議論する

- どうすれば最良な検定方式を構築できるか
 - 良い棄却域とは何か
 - 良い棄却域を導く方法とは

最強力検定

すべての $\theta_0 \in \Theta_0$ に対して,

$$\beta_W(\theta_0) = P_{\theta_0}((X_1, X_2, \dots, X_n) \in W) \leq \alpha$$

を満たす棄却域 W のうち, ある特定の $\theta_1 \in \Theta_1$ に対して,

$$\beta_{W^*}(\theta_1) \geq \beta_W(\theta_1)$$

を満たす棄却域 W^* を $\theta = \theta_1$ に対する最強力棄却域という

また, 最強力棄却域 W^* を用いた検定を

最強力検定 (most powerful test) という

最強力検定の構成方法

□ 単純仮説 vs 単純仮説の場合

帰無仮説 $H_0: \theta = \theta_0$ 対立仮説 $H_1: \theta = \theta_1$

- 最強力検定を構成するためには
 ネイマン・ピアソンの補題
 を用いればいいことが知られている

ネイマン・ピアソンの補題

$\Theta_0 = \{\theta_0\}, \Theta_1 = \{\theta_1\}$ とし, 母集団分布 P からの無作為標本を X_1, X_2, \dots, X_n とする。

$$H_0: \theta = \theta_0 \text{ vs } H_1: \theta = \theta_1$$

に対する最強力棄却域 W^* は

$$W^* = \left\{ (x_1, x_2, \dots, x_n) \mid \frac{\prod_{i=1}^n f(x_i; \theta_1)}{\prod_{i=1}^n f(x_i; \theta_0)} > k \right\}$$

によって与えられる。ここに有意水準を α とするとき,

$$P_{\theta_0}((X_1, X_2, \dots, X_n) \in W^*) = \alpha$$

を満たすように k を定める。

正規母集団の仮説検定

□ 母集団

- 平均 μ （未知），分散 σ^2 （既知）の正規母集団

□ 無作為標本 X_1, X_2, \dots, X_n

□ 仮説

- $H_0: \mu = \mu_0$ vs $H_1: \mu = \mu_1 (> \mu_0)$

この統計的仮説検定に対する最強力棄却域 W^* を導出する

最強力棄却域 W^* の導出 (1)

$$\bar{x} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i$$

$$\prod_{i=1}^n f(x_i; \mu) = \prod_{i=1}^n \frac{1}{(2\pi\sigma^2)^{1/2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} (x_i - \mu)^2\right)$$

$$= \frac{1}{(2\pi\sigma^2)^{n/2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2\right)$$

$$= \frac{1}{(2\pi\sigma^2)^{n/2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \left(n(\bar{x} - \mu)^2 + \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2\right)\right)$$

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2 &= \sum_{i=1}^n [(\bar{x} - \mu) + (x_i - \bar{x})]^2 \\ &= \sum_{i=1}^n [(\bar{x} - \mu)^2 + (x_i - \bar{x})^2] \\ &= n(\bar{x} - \mu)^2 + \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n (\bar{x} - \mu)(x_i - \bar{x}) &= (\bar{x} - \mu) \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x}) \\ &= (\bar{x} - \mu)(n\bar{x} - n\bar{x}) \\ &= 0 \end{aligned}$$

最強力棄却域 W^* の導出 (2)

$$\begin{aligned}\frac{\prod_{i=1}^n f(x_i; \mu_1)}{\prod_{i=1}^n f(x_i; \mu_0)} &= \frac{\frac{1}{(2\pi\sigma^2)^{n/2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} (n(\bar{x} - \mu_1)^2 + \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2)\right)}{\frac{1}{(2\pi\sigma^2)^{n/2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} (n(\bar{x} - \mu_0)^2 + \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2)\right)} \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} (n(\bar{x} - \mu_1)^2 - n(\bar{x} - \mu_0)^2)\right)\end{aligned}$$

したがって、最強力棄却域 W^* は次のようになる。

$$\begin{aligned}W^* &= \left\{ (x_1, x_2, \dots, x_n) \mid \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} (n(\bar{x} - \mu_1)^2 - n(\bar{x} - \mu_0)^2)\right) > k \right\} \\ &= \{ (x_1, x_2, \dots, x_n) \mid \bar{x} > k' \} \quad k' = \frac{(2\sigma^2/n) \log k - \mu_0^2 + \mu_1^2}{2(\mu_1 - \mu_0)}\end{aligned}$$

最強力棄却域 W^* の導出 (2) $k' = \frac{(2\sigma^2/n) \log k - \mu_0^2 + \mu_1^2}{2(\mu_1 - \mu_0)}$

$$\exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2}(n(\bar{x} - \mu_1)^2 - n(\bar{x} - \mu_0)^2)\right) > k$$

$$\Leftrightarrow -\frac{1}{2\sigma^2}(n(\bar{x} - \mu_1)^2 - n(\bar{x} - \mu_0)^2) > \log k$$

$$\Leftrightarrow -n(\bar{x} - \mu_1)^2 + n(\bar{x} - \mu_0)^2 > 2\sigma^2 \log k$$

$$\Leftrightarrow -(n\bar{x}^2 - 2n\mu_1\bar{x} + n\mu_1^2) + n\bar{x}^2 - 2n\mu_0\bar{x} + n\mu_0^2 > 2\sigma^2 \log k$$

$$\Leftrightarrow 2n(\mu_1 - \mu_0)\bar{x} > 2\sigma^2 \log k - n\mu_0^2 + n\mu_1^2$$

$$\Leftrightarrow \bar{x} > \frac{(2\sigma^2/n) \log k - \mu_0^2 + \mu_1^2}{2(\mu_1 - \mu_0)} \quad (\because \mu_0 < \mu_1 \text{ より } (\mu_1 - \mu_0) > 0)$$

最強力棄却域 W^* の導出 (3)

帰無仮説 $H_0: \mu = \mu_0$ が真のとき $Z = \frac{(\bar{X} - \mu_0)}{\sqrt{\sigma^2/n}} \sim N(0,1)$

$$\alpha = P_{\mu_0}((X_1, X_2, \dots, X_n) \in W^*)$$

$$= P_{\mu_0}(\bar{X} > k')$$

$$= P_{\mu_0}\left(\frac{(\bar{X} - \mu_0)}{\sqrt{\sigma^2/n}} > \frac{k' - \mu_0}{\sqrt{\sigma^2/n}}\right)$$

$$= P_{\mu_0}(Z > z(\alpha))$$

$z(\alpha)$: 標準正規分布の上側 $100\alpha\%$ 点

したがって, $z(\alpha) = \frac{k' - \mu_0}{\sqrt{\sigma^2/n}}$

を満たすとき, W^* を用いた検定の
第1種の誤り確率が α となることから,

$$k' = \mu_0 + z(\alpha)\sqrt{\sigma^2/n}$$

となるように, k を定めればよい

最強力棄却域 W^* の導出 (4)

最強力棄却域 W^*

$$\begin{aligned} W^* &= \left\{ (x_1, x_2, \dots, x_n) \mid \frac{\prod_{i=1}^n f(x_i; \theta_1)}{\prod_{i=1}^n f(x_i; \theta_0)} > k \right\} \\ &= \{ (x_1, x_2, \dots, x_n) \mid \bar{x} > k' \} \\ &= \left\{ (x_1, x_2, \dots, x_n) \mid \bar{x} > \mu_0 + z(\alpha) \sqrt{\sigma^2/n} \right\} \end{aligned}$$

したがって、次の検定方式が考えられる。

$$\bar{X} \in \left(\mu_0 + z(\alpha) \sqrt{\sigma^2/n}, \infty \right)$$

のとき、帰無仮説 $H_0: \mu = \mu_0$ を棄却する。